

BODY IN HEAVEN AND SOUL ON EARTH: ルネサンスの死, タンの死

—Epicedes and Obsequiesをめぐって—

岡 村 眞 紀 子

1610年と11年, John Donneは二つのanniversaryを書いた。10歳の少女Elizabeth Druryへの挽歌であった。1作目のanniversaryでは, Elizabethの死と共にこの世も死に, 腐敗し, 均衡も, 秩序も, ひいては調和も, 美しき調べも失くしたと嘆いた。¹⁾ 2作目では, Elizabethがこの世から天国へと, 全き存在となって昇っていったこと, そこにこの世の救いと希望を見出し得ることを詩った。人の魂と人の世の限りない昇華の可能性を, 瞑想 (meditation) の内に²⁾見出すのである。これらはElizabethの父親Roger Druryの依頼をうけてのelegyであったが, Elizabethの死を悼む詩, というより, Elizabethなる一人の女性に, 人の世の姿, 人の世の本質, 人の魂を重ね, また時にはQueen Elizabeth Iの姿をも重ねて, Donneが生きていた時代, 世の中, そして人が生きているこの世を悼む詩であった。絶望と悲しみ, 望みと慰めをうたう, まさに挽歌 (elegy) であった。

Donneは, この二つのanniversaryの他にも6人に7編の葬送歌を捧げているが, そのうち5編がこの *Anniversaries*の前後に書かれている。生涯Donneは幾多の死を経験してきた。幼くして父, 姉, 妹の死に出会い, 若くして弟の獄死を経験する。カトリックの家に生まれ育ち, Thomas Moreとも親戚関係にあったDonneにとって, カトリックの僧をかくまった廉で投獄され, そこで病死した弟の死は重いものであったはずである。22歳のときであった。1601年, 29歳で秘密結婚をしたDonneは妻との間に, 1612年までの11年間に11人の子供を次々に得, また次々に失った。1617年, 13人目の子どもが死産で生まれ, (1612年にもう1人が死産で生まれている) 5日後, 妻Annをも失うことになる。Donneが6編の葬送歌 (epicedes, obsequies) を書いたのが, ちょうどこの頃のことであったことはあながち無関係とはいえない気がする。尤も, *Anniversaries*と同様, Donneはこれらの葬送歌, 挽歌で, 亡くなった人を悼みつつ, またその功績や人格を讃えつつ, 彼自身の哲学ともいべきものを詩っている。単に, 人の死を悼むだけに終わらないからこそこれらの詩がこの時期に書かれたことに敢えて眼を向けてみたいと思うのである。またこれらの葬送歌の後2編については1編が1595年頃, 他の1編が1625年頃に書かれていて, Donneの詩作の始まりと終わりを示しているのも興味深いことである。

ところで、Donneの詩作のうち、葬送歌、挽歌は、ほとんど評価されてこなかった。19世紀までは、葬送歌そのものが文字通り葬送歌以上の見方をされなかったこともあるが。今世紀に入ってからその評価は様々で必ずしも再評価されたといえるものではなかった。H.J.C.Griersonの、1912年のDonneの詩集への序文の次の言葉がそれをよく表すものであろう。

Without some touch of passion, some vibration of the heart, Donne is only too apt to accumulate 'monstrous disgusting hyperboles'. This is very obvious in the *Epicedes*—his complimentary laments for the young Lord Harrington, Miss Boulstred, Lady Markham, Elizabeth Drury and the Marquis of Hamilton, poems in which it is difficult to find a line that moves. Indeed, seventeenth-century elegies are not as a rule pathetic. ... but in general seventeenth-century elegy is apt to spend itself on three not easily reconcilable themes—extravagant eulogy of the dead, which is the characteristically Renaissance strain, the Mediaeval meditation on death and its horrors, the more simply Christian mood of hope rising at times to the rapt vision of a higher life.³⁾

さらにGrierson は次のようにも述べている。

But neither Donne's art nor taste—to say nothing of his character—is seen to best advantage in the abstract, extravagant and frigid conceits of these epistles and of such elegies as those on prince Henry and lord Harrington. The strain of eulogy to which Donne suffers himself to rise in these last passes all limits of decency and reverence. To two feelings, Donne was profoundly susceptible, and he has expressed both with wonderful eloquence in verse and prose. He has all the renaissance sense of the pomp and the horror of death, the leveller of all earthly distinctions; and he can rise, like Sir Thomas Browne, to a rapt appreciation of the Christian vision of death as the portal to a better life. But his expression of both moods, when he is writing to order, is apt to degenerate into an accumulation of 'gross and disgusting hyperboles.' In an elegy on Mrs Bulstred, which is divided into two separately printed poems, *Death I recant* and *Death be not proud*, these moods are combined in a sonorous and dignified strain.⁴⁾

17世紀の挽歌は亡くなった人への感情を詩う悲歌というより、死者に対する頌歌、死への瞑想と昂められた生への宗教的恍惚的ヴィジョンを詩うものであることを前提としつつ、尚Donneの葬送歌が心打つものになり得ないとしている。Griersonはその理由を、過ぎたる大袈裟な表現ゆえとしているが、それを Donneは自らのルネサンス精神の崇高な表現へと昇華しているとも考えているのである。しかし、1633年のDonneの最初の詩集に寄せた挽歌でIzaak Waltonは、これらの葬送歌を大理石の碑にも勝る永遠の生命をもった詩であると称讃している。

Did he give days,
Past marble Monuments to those whose praise
He wou'd perpetuate? ('An Elegy on Dr. Donne.' st. 5, ll. 5-7)

その理由はこうである。

Did he write Hymns, for Piety and Wit,
Equal to those great grave Prudentius writ?
Spake he all Languages? Knew he all Laws?
The grounds and use of Physick: …… (st. 6 ll. 11-14)⁵⁾

Donneの詩の価値の一つは、その詩を裏打ちしている17世紀の文化の背景とそれに寄せるDonneの関心のあり様、そしてその詩作への現れ様といえるであろう。それは葬送歌に限らないことではあるが。

1609年、Donneは3編の葬送歌を書いた。'Elegie on the Lady Marckham' , 'Elegie on Mrs Boulstred' そして 'Elegie, Death' である。3編目も2編目と同じくMrs Boulstredに捧げられたものであり、この2作はもともと1編の詩であったとの説もある。⁶⁾ Lady MarckhamはBedford夫人Lucy Russellのいとこであり、Bedford夫人邸のTwickenham Parkで亡くなった。Mrs BoulstredもBedford夫人の親戚の娘で、やはり Twickenham Parkで亡くなっている。Donneの恋愛詩のモデルといわれ、Anniversariesを捧げられたElizabethの父親Robert Druryとも懇意であった。これらの詩はBedford夫人からの依頼を受けて書いたものでもあり⁷⁾、彼女のパトロネージュを得んがための詩作でもあった。当時、宮廷や、ヴァージニア会社への就職活動がうまくいかず、苦境にあった Donneであったから。

7編の葬送歌ではいずれもキーワードとなることばが繰り返し使われていることが目につく。'vertue' , 'circle' , 'reason' , 'soul' , 'sin' など。これらの言葉の周りで、死が、生が語られ、人が、神が詩われる。その7編の中でも1609年の3編は、他の4編に比べ、直接的に死について詩っている。故人への讃美も直接的である。死について詩うということは、生について

詩うことであり、人間存在について詩うことである。3編のうち最初に書かれた 'Elegie on the Lady Marckham' では人にとって死とは何か詩われる。ここでのキーワードは 'sea' , 'ocean' (海) である。

Man is the World, and death th'Ocean'

To which God gives the lower parts of man.

(ll. 1-2)

人は陸であり、海に囲まれていない陸はない。海はいつどこから人に押し寄せてくるか分らない。そのように暴力的にLady Marckhamを連れ去った死である。死は涙を誘い、海は潮となって押し寄せる。'sea' , 'ocean' は 'land waters' 即ち 'tears' を呼び、'sea' は 'tide' となるのである (ll. 7-12)。涙は丸く、眼からこぼれる。眼鏡のイメージにつながるが、涙が眼に溢れると、目の前はぼやけて見えない。眼鏡は視界を良くするものだが、この眼鏡は 'false Spectacles' なのである (l.15)。涙は人の感情ゆえのものだから、この涙によるくもりは感情の露 (passions mist) で、死を通して見つめ、理解すべき人の本質が見えなくなる。人は何なのか。そして死んでしまったLady Marckhamのことさえも (l.8, ll.15-16)。人の死に臨んで人が涙を流すのは感情なのだが、それはもっと深くいえば、人の魂が、その罪深さゆえに、死を義として見つめられず流すのである。それゆえ、罪を洗い流すものではなく、涙を流すことの中にむしろ罪は秘む (l.11)。真実を見えなくし、水(海)に奪われたLady Marckhamを嘆いてさらに水浸しにすると、皮肉なパラドックスである。'Spectacles' は、この時代には新しいものが発明され、その力を発揮し始めていた。望遠鏡である。望遠鏡で見る世界ははるか彼方に時間を逆行した世界であると同時に、今まで知られていなかった新たな天体の世界でもある。海の潮も時を刻む天体の巡りにかかわる現象であり、'tide' が「時間」の意味を持つのもそれゆえであることはいうまでもない。⁸⁾ Lady Marckhamは死の海によって強奪された。しかし、彼女はその肉体を死の海によって洗われ、浄化されもした。

In her this sea of death hath made no breach,

But as the tide doth wash the slimie beach,

And leaves embroder'd workes upon the sand,

So is her flesh refin'd by deaths cold hand.

(ll. 17-20)

浄化されて動く肉体の「彼が残した刺繍の如き砂紋」のイメージはいかにも静かに美しい。死は肉体を滅ぼすが、罪ゆえの肉体の死により、魂は原罪ゆえの死から解放される。

If carnall Death (the younger brother) doe

Usurpe the body, 'our soule, which subject is

To th'elder death, by sinne, is freed by this; (ll. 30-32)

肉体は墓の中でなおも時とともに浄化されていく。墓は錬金術に使われる蒸留器 'linbecke' である。その中で肉体は浄化され、蒸留されて、自ら 'Elixar' となる。錬金術で万物を金に変える妙薬 'Elixar' となって周りのものを錬金するのである (ll.21-28)。死の海に奪い去られ、人に涙を絞らせた Lady Marckham が、死により人を至福に運ぶ存在となる。死とはそういうものなのである。Lady Marckham の死は悲しいが、死による彼女の肉体の浄化と魂の解放を思えば喜びとなり慰めとなる。またもここでパラドックス。この Donne の特有のパラドックスがこの詩を elegy として成立させている。Lady Marchnam の肉体が Elixar なら、一方魂は天国に昇り全き存在となっている。

How fit she was for God, (1.53)

というわけである。それでいて 'How fit for us, how even and how sweet, / How good in all her titles, and how meet, / To have reform'd this forward heresie, / That women can no parts of friendship bee; / How Morall, how Divine shall not be told, / Lest they that heare her vertues, thinke her old:' (ll.55-60) と続く。まさに先の詩行をうち消すかのような人間の視点からの彼女の評価で、「女は友情の対象とはならない」などという偏見に異を唱えるなど余りにも卑俗的で、現代にも通ずるようでおかしくさえある。しかし、この最後の 8 行はこの詩の昂揚を落としめているようで Donne らしくないと云わざるを得ない。

同じ年に書かれたあとの 2 編の葬送歌のうち 1 つは 'Elegie on Mrs Boulstred' と題されていて、Mrs Boulstred に捧げられたものであることがはっきりしているが、もう 1 編は Grierson 版では 'Elegie. Death' と題されていて、詩中でも 'she' が誰であるかは全く示唆されていない。が、前に述べたように Grierson は *The Cambridge History of English Literature* の中で、これら 2 編をもともと 1 編であったと考えている。1619年から1629年の間に集められたマニュスクリプト集では 1 編になっているからである。その後、Grierson は 'Elegie. Death' を Lady Marckham に捧げたものであるとしている。内容は別のものだと考えるからである。⁹⁾しかし、Shawcross は、'Was't not enough to have that palace wonne, / But thou must raze it too, that was undone?' (ll.15-16) の 2 行から、1 度目の破壊を Lady Marckham の死を指すものとし、この詩をその 4 ヶ月後に他界した Mrs Boulstred に捧げたものとしている。¹⁰⁾ 意見は種々あるようだが、筆者はこれらを Mrs Boulstred に捧げられた 2 編の詩と考える。その内容から到底 1 編につながるものとは考えられないし、もし 1 編にすれば、Saintsbury によって 'best of the Funeral Elegies' とまで言われた¹¹⁾ 'Elegie. Death' も、退屈で冗長なものにすぎなくなってしまうであろう。

‘Elegie on Mrs Boulstred’ も、Lady Marckhamへの挽歌と同じく、人にとっての死のありようと、死に対する人のありようを詩う。いきなり ‘Death I recant, and say, unsaid by mee / What ere hath slip’d, that might diminish thee.’ (ll.1-2) と、自らを否定することばで始まり読者を困惑させるこの詩は、死の凶暴なまでの力強さを強烈に印象づける。‘Spirituell treason, atheisme, ’tis, to say, / That any can thy Summons disobey.’ (ll.3-4) 死の召喚を拒絶できるなどといえ、それは魂の謀反であり、無神論を唱えることにもなるとすら言い切れる。この書き出しは、Holy Sonnet X ‘Death be not proud’ との関連が話題になるが、¹²⁾ 実は、同じテーマを詩ったものであることはこの詩の最後で明らかになる。人の世 ‘Earth (地球)’ に存在するものは全て死の餌食である。地球の死の食卓の喩えは、豪快で、パノラミック、しかもパワフルで死の荒々しい息づかいまで伝わってくる。死の脅威を表して余りある条りである。

Th’earths face is but thy Table; there are set
Plants, cattell, men, dishes for Death to eate.
In a rude hunger now hee millions drawes
Into his bloody, or plaguy, or sterv’d jawes. (ll.5-8)

‘his bloody, or plaguy, or starv’d jaws’ は我々の肉を噛む死であり、Hieronymus Bosch や Pieter Brueghel の死の寓意を彷彿とさせる。宗教の対立が打ち続き、処刑が処刑を生み、ペストが横行し、農地が荒廃した中世末期からルネサンスへのイギリスの姿でもある。¹³⁾ 死は地上だけでは満たされず、水中深くもぐったのち宇宙を巡る。

He rounds the aire, and breakes the hymnique notes
In birds (Heavens choritsters,) organique throats,
Which (if they did not dye) might seeme to bee
A tenth ranke in the heavenly hierarchie. (ll.17-20)

earth (土) から water へ、air へと、基本元素を上へ上へと昇り、しかし、fire へ、ether へとまでは昇りつめていけない死である。earth (地球) から宇宙に飛び出した死は天体と共に宇宙を巡り、その調和を乱すのである。9つのヒエラルキーに従って天使が天体を動かし、‘Heavens chorus’ で ‘hymique notes’ の harmony を奏でていた宇宙の調和であったが、死が、当時の思想のままに ‘Eating the best first, well preserv’d to last.’ (l. 10) と、最も純粹で有徳の Mrs Boulstred を奪ってその調和を壊してしまった。Anniversaries の嘆きがここに既に歌われているのである。

死はいつかにしてこの世に入ったのか、と死の根本を問い (ll.21-2), 死の前には全てが無

に等しい, と虚無感が漂う。これは17世紀世紀のイギリス人を被っていた雰囲気であっただろう。人の生は死に他ならないと。

Our births and lives, vices, and vertues, bee
 Wastfull consumptions, and degrees of thee.
 For, wee to live, our bellowes weare, and breath,
 Nor are wee mortall, dying, dead, but death. (ll.27-30)

ここから詩のトーンが変わり, 'soul', 'vertue', 'sinne' が次々とキーワードとして登場する。人の魂と肉体の問題, そしてそれらと死との関わりは常に当時の人々の心にある問題であったし, Donneにとっても同様であった。この頃のDonneは, 世俗の職を手に入れようと熱望していたが叶えられず, 申し出られた聖職禄も自分の魂に自信がもてず断っている。しかも, 死同然の妻や子どもたちを眼のあたりにして苦悩していたのであるから。¹⁴⁾ 死は否応なく魂と肉体の間に割って入り, 両者を引き離す。罪が人と神の御心との間に割って入るように。しかし, 割り込まれたからといって両者は別居 (separation) を余儀なくされるだけで, 離婚 (divorce) にまで追いこまれるわけではない (ll.43-45) と言う。また, 魂と肉体とは王と宮廷のようなもので, 王がその居を移したからといって宮廷がなくなるわけではない (ll.39-42) とも。Henry VIIIがローマ法王から破門を受けてイギリス国教会をうち立て, 離婚を合法的なものとしたのはわずか25年前のことだった。'divorce' はそれほどの重みを持ち, それは宗教間, また国家間の対立, 離反を導くものでもあった。¹⁵⁾ また, 宮廷にいない王もいた。そういった事態が, Elizabeth Iによってようやく落ちついた当時のイギリスではあったが, 国民はそれまでの不安定な国政への不安を心に抱いたままであったと思われ, 死の人への暴力性と合わせて, 社会状況の国民への暴力性が詩われていると言えよう。しかし, いかに力づくで肉体を奪い去ったとて, 死の勝利には終わらない。

Her Soule is gone to usher up her corse,
 Which shall be'almost another soule, for there
 Bodies are purer, then best Soules are here. (ll.46-48)

Mris Boulstredの魂は天に昇り, 神と合一し, 肉体もこの世にあっての魂より遙かに純粋なほどに純化されるのであるから, 未だ若きMris Boulstredを奪い去った死の行為がいかに愚かで早まったものであったか。Mris Boulstredがいかに美しく, 秀れた女性であったか, 彼女が若くして死ぬのはいかに惜しむべき, また悲しむべきことであったかを詩う最後の詩行 (ll.51-70) は, 'Eating the best first, well preserv'd to last' の哲学に叶ったものであるかもしれないが, いかに美しく聡明な女性も年を経れば迷妄的になったり, 傲慢になったりすることもあると

も言っているようである。この詩も前半のDonneらしい機知が後半では息切れしているように思われてならない。一方、死者への讃歌としては‘Elegie. Death’が断然精彩を放っていてすばらしい。そういう意味では2編合わせて1編であるという解釈は当たっているというべきであるかもしれない。

‘Elegie. Death’は、1編全体が死者への讃歌である。が、その讃歌を捧げるのに‘Language thou art too narrow, and too weake’ (l.1) と言い放ってしまうと、これから捧げる自らの詩そのものを無効にしてしまう。Mrs Boulstred を失った悲しみは、あまりに大きく、深く、どんなことばをもってしても表わせないほどのものだ、ということであるのだが、それをことばで表わそうとしている自分の詩はどうなるのか？それを知りつつ、このような2行で始めるパラドックスがまたDonneらしい。書き出しにおいて‘thou’は‘language (ことば)’であったのが9行目から‘sorrow (悲しみ)’に変わる。‘the fift and greatest Monarchy’ (l.10) つまり、バビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマにつぐ世界を制覇する帝国は、世界が全地球上に広がろうとしているこの時代には、南ヨーロッパ、地中海周辺だけでは終わらない。それは死でしかなく、その王国の王‘Tyrant’はsorrowである。しかし、sorrowがその領土を究極まで広げるべく、まさにその専制的な権力を発揮してMrs Boulstred を奪い去っていった。しかしそれはSorrowの勝利につながらない、というところからMrs Boulstredへの讃歌が始まる。

She was too Saphirine, and cleare for thee;

...

Alas, she was too pure, but not too weake

Who e'r saw Christall Ordinance but would break? (ll. 21-24)

彼女の純粋さと透明さは、錬金術のフラスコの如し。いかなる金属をも金に変えてしまうフラスコの危ういまでの純粋さである。そのフラスコを壊してしまったのではもう何も生まれえない。そのフラスコが壊れると共に他の全てが壊れてしまうのだから。また

For of all morall vertues she was all,

He Ethicks speake of vertues Cardinall. (ll. 33-34)

彼女は全ての‘vertue’を秘め、なかなづく4基本徳目と称される justice (正義), prudence (分別), temperance (節制), fortitude (忍耐) は彼女のものである。

Her soule was Paradise; the Charubin

Set to keepe it was grace, that kept out sinne.

Shee had no more then let in death, for wee
All reape consumption from one fruitfull tree. (ll. 35-38)

彼女はエデンの国, 罪もなく, 死もなかった楽園であった。だが, 彼女を死が奪ったということで, 死が楽園に入り込んだ。以降, 人は死すべき命を担うことになった。Eve のように罪を犯して死を招いたのではなく, Mrs Boulstredの美しさと崇高さゆえに死が入り込んだのである。だから 'Elegie on Mrs Boulstred' にあったように 'how cam'st thou in? / And how without Creation didst begin?' (ll.21-22)と問いたくなるのだが。Mrs Boulstredは今や, この世から奪われ天国にいる。有徳の女性なるゆえ, これは殉教であり, 彼女は聖列加入も許されて, 'Saint (聖人)' なのである。でもその彼女は我々の眼の前にはいず, 天国の天使の最高位にまで昇りつめての神の傍らにいる。それゆえ, 我々には 'holiday (聖祝日)' が与えられた (ll. 43-44, 51-53)。

Her heart was that strange bush, where, sacred fire,
Religion did not consume, but'inspire
Such piety, so chast use of Gods day,
That what we turne to *feast*, she turn'd to *pray*,
And did prefigure here, in devout tast,
The rest of her high Sabaoth, which shall last. (ll.45-50)

Mrs Boulstredの精神を, 「Moseの柴に現れた神」¹⁶⁾ と表して, 彼女が人の救いになることを暗示している。

彼女は 'Christall Ordinance' であり, 'Paradise' であり, 'strange bush', 即ち人の知恵の結集, 人の世の至福, 人の信仰の証である。17世紀のイギリスにあってこれほどの讃辞はあるだろうか。これほどきらびやかな詩行はあるだろうか。何人かの批評家が言うように大袈裟すぎる表現なのかもしれないが, その大袈裟な表現が, 華やかだ知的な詩行を紡ぎ, 読むものの心を昂揚させる。我々のもとに残されたのはただ彼女の亡骸, つまり肉体のみだが, その肉体も昇華されてこの詩は終わる。

The ravenous earth that now woos her to be
Earth too, will be a *Lemnia*; and the tree
That wraps that christall in a wooden Tombe,
Shall be tooke up spruce, fill'd with diamond; (ll.57-60)

土に帰った彼女の肉体は解毒剤とも消炎剤とも、また傷口を塞ぐともいわれるレムノスになって私たちの心の傷をいやす。¹⁷⁾ 彼女の亡骸を入れた木の棺も青々とした常緑の木となり、ダイヤモンドと化したレムノス¹⁸⁾ の彼女を抱いて天国に昇っていくのである。完璧なまでの完全性と化した彼女を想い、歎びを深く感じつつも彼女の死を悲しむ心は、どんなに押えても押えきれないのである。

And we her sad glad friends all beare a part
Of grieffe, for all would waste a Stoicks heart (ll. 61-2)

このelegyはeulogyとしては最高の作品の1つとして数えられるであろう。これらの3編は1610年、11年作の2編の*Anniversaries*へとつながり、詩人はますます厭世観を募らせつつ、*virtue*による魂の浄化へと希求を深めていく。

妻が死産をした1612年、18才で早逝したPrince Henry に、また四女、三男が相次いで亡くなった1614年、同じく早逝したLady Bedfordの弟Lord Harringtonに葬送歌を書いている。死と死者への想いと信仰の揺れ、生活の苦しさがこれらの葬送歌を書かせたのであろう。これら2編はDonneらしい傑作であり、特にLord Harringtonへの葬送歌は258行に及ぶ大作であり、形而上詩人Donneの詩才が余すところなく発揮された作品となっている。Prince Henryへの葬送歌では人のreason（理性）とfaith（信仰）と死との問題、Harringtonへの葬送歌では、宇宙論が、それぞれへの讃辞と合わせて詩われ、先の3編と合わせてDonneの死生観、人生観、世界観が見渡せる。

‘Elegie upon the untimely death of the incomparable Prince Henry’ では‘reason’がキーワードになる。reasonに対応して‘faith’もキーワードになるが、他の葬送歌には見られず、この詩でのみ目につくのは、‘peace（平和）’と‘love（愛）’である。

Looke to mee faith, and looke to my faith, God;
For both my centers feele this period.
Of waight one center, one of greatnesse is;
And Reason is that center, Faith is this;
For into'our reason flow, and there do end
All, that this naturall world doth comprehend:
Quotidian things, and equidistant hence,
Shut in, for man, in one circumference.
But for th'enormous greatneses, which are
So disproportion'd and so angulare,

BODY IN HEAVEN AND SOUL ON EARTH : ルネサンスの死, ダンの死

As is Gods essence, place and providence,
Where, how, when, what soules do, departed hence,
These things (eccentrique else) on faith do strike;
Yet neither all, nor upon all, alike.
For reason, put to'her best extension,
Almost meetes faith, and makes both centers one.
And nothing ever came so neare to this,
As contemplation of the Prince, wee misse.
For all that faith might ccredit mankinde could,
Reason still seconded, that this prince would.
If then least moving of the center, make
More, then if whole hell belch'd, the world to shake,
What must this do, centers distracted so,
That wee see not what to beleeve or know? (ll.1-24)

人は、2つの中心を有している。理性と信仰とを。理性は 'waight' の中心で信仰は 'greatnesse' の中心である。その価値や意味を人が測り、図ることができるものの基準をなすのが理性であって、人には測ることも図ることもできないものの基いとなるのが信仰である。¹⁹⁾ この2つの中心はどんどん延ばしていくと1つに合一する。つまり理性は限りなく信仰に近づき得るものなのである。Prince Henry は17世紀のイギリスにとっての2つの中心であったという。人の世の事象は全て理性で認識されるが、神の本質の如きものは理性の力では及ばず、信仰によらなければならない。Prince Henry は人の理性の頂点に立つもので理性の理性ともいべきものであって、Prince Henry が正義とすることは全ての理性が良しとすることである。信仰は唯一のもので、信仰が信ずるものは、全ての人が信ずべきものである。Prince Henry の喪失は、Donneにとっても人にとってもこの世にとっても2つの中心を共に失うことになる。この理性と信仰、そしてPrince Henryとの関係のイメージラリーが上の引用のように読む者の心を奪う。

ところで、この世の事象は理性から等距離にあり、いわば、理性を中心とする円周の上にある。しかし、魂の問題や、神の本質は、理性1つを中心とするものではなく、人の理性で幾何学的に図れるものではない。'disproportion'd (不均衡)' で 'angulare (角があって円ではない)' なのは、この世で均衡がとれず、完全形の円をつくらない、別の基準でみななければならないものだということである。それまで地球という1つの中心をもって存在すると考えられていた宇宙が、実は2つの中心を有し、その一方に太陽を配する楕円形をなすとのKeplerの新説に興味をかき立てられたDonneの好奇心の書かせた詩行であろうか。そしてこの2つの中心がPrince Henryにおいて1つに合一すれば宇宙は全き円となり、完全な姿となる。地球が1つの中心で、ほんの少し震えただけでも地震が起って大変なのに、2つの中心を失ってしまったのでは人は何を指針

に生きればいいのか。宇宙を経巡る壮大な構想で人間存在の根本を見ようとするこの詩の歌い出しの23行は、切々とHenryへの惜別を歌って、これだけで完結した1編のelegyとなっている。

Prince Henryは、また 'his great fathers greatest instrument, / And activ'st spirit, to convey and tie / This soule of peace, through Christianity' (ll. 32-34) であり、'hee would make / This generall peace, th'Eternall overtake' (ll. 35-36) である。James IはDonneにとっては聖職と神学博士を与えてくれ、擁護してくれた王ではあったが、カトリック、ピューリタン共に排除して「火薬陰謀事件」を引き起こし、国王大権を主張して議会との対立を深めていった王で、国民には不安、不満があった。これらの詩行は、王子Henryに平和を求めるイギリス国民の心の代弁であるようにも思われる。さらにその後続く詩行にあるように、Prince Henryの治世が、最後の審判の後にくるという平和の千年王国へと続いていくであろうと、国家の宗教的争乱の時代と、Donne自らの宗教的争克からの脱却への希求がうたわれる。²⁰⁾ 平和を保つのも理性の業というべきなのであろうか。

For to confirme this just beleefe, that now
The last dayes came, wee saw heav'n did allow,
That, but from his aspect and exercise,
In peacefull times, Rumors of war did rise. (ll.39-42)

しかし、そう確信を深めるのもPrince Henryの面立ちや勲しから戦の予感を感じるからだ。3度目に使われた 'peace' (ここでは 'peaceful' と形容詞になるが) は 'war' と同じ行で隣り合わせに使われ、'peace' のもつ逆説性を印象づける。Henryに争乱と平和を、終末と至福の具現をみるというパラドックスは、17世紀のイギリスの風潮と、Donneの魂の葛藤を表し、そのコンシートもDonneらしく知的に読むものを奔弄して、'But now this faith is heresie: we must / Still stay, and vexe our great-grand-mother, Dust.' (ll. 43-44) と落ち込ませる。こうして人の世の理性Prince Henryを失くし、信仰もパラドクシカルに異端に陥った者には、もはや死ぬことも許されない (ll. 43-54)。しかし、理性はなく、悲しむことすらもできなくて死んでいるも同然 (ll.77-80) と、ここでもまたパラドクシカルに考えて到達するのは、Prince Henryが人の魂の神へのステップだということと、彼の 'the fires of love' ゆえに残された人も彼のところに到達し得るということである (ll.83-88)。'love'はただ1度しか使われないが、'peace' と共にこの詩を特色づけていることばである。ここでの 'she-Intelligence (女天使)' は、Prince Henryがスペイン王女との結婚が成立しなかったことや、その後も結婚せず、女性に関心を持たなかったことが背景にあるといわれたり²¹⁾、Donneが2編の anniversary の中でこの世と天国との橋渡しをしたと詩ったElizabeth Druryのことを意識していると言われたり²²⁾ しているが、Donne自身がこの詩の中で 'Who ere thou bee' (l. 91) と詩っているように特定の女性を指すわけではない。人は生きなければならぬのだから、この世の軌道を司る天使を見

BODY IN HEAVEN AND SOUL ON EARTH: ルネサンスの死, ダンの死

その声を聞いてこの世のあり方と行く末を聞きたいのである。しかし, 'she-Intelligence' と天使を女性に規定することによって, 'love' にエロスのな感触を与えているのは確かである。イギリスの行く末を暗示するPrince Henryと地球の運行を司る天使の2人は, この世との2つの中心, 理性と信仰で, 2人がこの世の姿なら, 自分はそれを歌う天のコーラスの天使となろう, 2人によってこの世が調和を保って守ればそれを妙なる調べとして奏でようと, 世俗にも職を求め, 聖職に就くことにも心を向けるDonneが詩人としての自己を意識した1行でこの詩は終わる。理性のPrince Henryが信仰の天使に恋の炎を燃やして1つになれば, 天体(地球)の天使に自分になるという二重構造と, エロスのな言葉で精神的な世界を描く二重性という, いかにもDonneらしい詩行で。

Oh may I, (since I live) but see, or heare,
That she-Intelligence which mov'd this spheare,
I pardon Fate, my life: Who ere thou bee,
Which hast the noble conscience, thou art shee,
I conjure thee by all the charmes he spoke,
By th'oathes, which onely you two never broke,
By all the soules yee sigh'd, that if you see
These lines, you wish, I knew your history.
So much, as you, two mutuall heav'ns were here,
I were an Angell, singing what you were. (ll.89-98)

このDonneの宇宙観, 世界観, 人間観は2年後に書かれた 'Obsequies to the Lord Harrington, brother to the Lady Lucy, Countesse of Bedford' でも披瀝される。この詩のキーワードは前半では 'vertue', 後半 'triumph' で, Lord Harringtonへの頌歌であることはそれだけでも分かる。が, これらを被うイメージが音楽であり, 望遠鏡, 鏡であり, 時間, 潮, 円, とまさに17世紀のネオプラトニック世界観のイメージである。

Faire soule, which wast, not onely, as all soules bee,
Then when thou wast infused, harmony,
But did'st continue so; and now dost beare
A part in Gods great organ, this whole Spheare: (ll.1-4)

そして

Thou at this midnight seest mee, and as soone
As that Sunne rises to mee, midnight's noone,
All the world growes transparent, and I see
Through all, both Church and State, in seeing thee;
And I discerne by favour of this light,
My selfe, the hardest object of the sight. (ll.25-30)

また

God is the glasse; as thou when thou dost see
Him who sees all, seest all concerning thee,
So, yet unglorified, I comprehend
All, in these mirrors of thy wayes, and end. (ll.31-34)

Lord Harringtonが死んで今は夜の闇の中にある。潮は干潮。死を夜や干潮に喩え、眠りを死の似姿と考えるのは17世紀の常套的手法であり、思考であるが、次々とたたみかけるように9行にわたって続く描写は否応なく読むものを死の世界に誘う。労働者がベッドを墓場と紛うほどに眠りこけ、喚問を明日に控えた訴訟依頼人が訴訟を忘れて眠り、死刑囚も明日には真の眠りにつくというのに眠って死の予行演習をする…と。しかし、この真夜中にもこの世を去ったLord Harringtonのことを思うだけで、その思いの光がまるで太陽のごとく闇を照らし、Lord Harringtonを通して宗教も国家も何もかも解る。最も理解し難い自己が何たるかも解る。(ll. 25-30) Prince Henryと同じくLord Harringtonもこの世の理性なのである。この世は天国を示す地図であり、自分がLord Harringtonの地図ならば (l. 14), この世の眠りから真の眠りの死を、自己認識からこの世の理性を、認識することができる。神は 'true glasse' でLord Harringtonはその鏡を通して全てを悟るが²³⁾, Lord Harringtonもmirrorsで、その鏡を通して我々は全てを知る。(ll. 31-36) 神と人との橋渡しをしているのはvertueなのだが、Lord Harringtonこそvertueに他ならない。続く40行の間に12個の 'vertue', 'vertues', 'vertuous' がちりばめられ、Lord Harringtonがいかにvertuousな人であったか、神に近づくにはいかにvertueが必要なのか。1つ1つのvertueはどんなに移ろいやすく、もろく、掴みにくいものなのか、しかしvertueの本質はただ1つでそれはいかに移ろわないものなのか解ってくる。中でもvertueを鏡に喩え、人には見えない遙かな神もvertueを通すと倍率が拡大されてよく見えるという次の条りは、'trunkes (望遠鏡)'²⁴⁾, 'proportion (比率, 調和)', 'perspective (レンズ, 遠近法)'などの言葉が巧みに使われる。

Though God be our true glasse, through which we see

All, since the beeing of all things is hee,
Yet are the trunkes which doe to us derive
Things, in proportion fit, by perspective,
Deeds of good men; for by their living here,
Vertues, indeed remote, seeme to be neare. (ll.35-40)

神と人, 天国とこの世をつなぐのは天使の役割（‘virtue’は天使）である。²⁵⁾ここで再び天動説, プトレマイオス宇宙観が登場する。天使が太陽, 月, 空気を通して天国から地球へやってくると (ll.81-86), 望遠鏡にも大いなる関心を抱きつつ, なお天動説に執着する自己撞着は17世紀の文化と, そこに生きた知識人の精神を浮き彫りにする。‘virtue’の本質はただ1つ。nature (自然)もDestine (運命)も, spirit (霊)もまた然り。細かく種類分けしたり, ランクづけしたりするのは冒涇というもの。

for a point and one
Are much entire then a million. (ll. 67-68)

‘one’は全体をつくる部分の単位でありながらそれ自体完全である。また, プラトニズムにおいても1つの完全の表象は円であるが, 生の両端, 生と死とが閉じて円をつくる。魂は天国にあってコンパスの片足よろしく一所にとどまればもう一方の足の肉体が世界中何処を彷徨おうと常に真円の軌跡を残す。ギリシアの哲学や幾何学と, 地球を球体とする新天文学が同居する世界観である。しかも赤道に平行な緯線はどこをとっても大きさの違う円だが, 天文学的観察はgreat circles (l. 118), 即ち赤道や黄道を使うなどと, 新天文学にも詳しい。

Since one foot of they compasse still was plac'd
In heav'n, the other might securely'have pac'd
In the most large extent, through every path,
Which the whole world, or man the abridgment hath. (ll. 107-110)

Thou knowst, that though the tropique circles have

...

All the same roundnesse, evennesse, and all
The endlessnesse, of the equinoctiall;

...

Onely great circles, than can be our scale: (ll. 111-118)

Lord Harrington の生は、今や天国にある魂を中心点とする完全な円をなし、‘how to live well young, and how to die’ の指標となるが、死が許されない残された者の残りの生²⁶⁾への指標とはならない。生長らえれば、それだけ罪深い生となるから。²⁷⁾

and age endures

His Torrid Zone at Court, and calentures
Of hot ambitions, irrelegions ice,
Zeales agues, and hydroptique avarice,
Infirmities which need the scale of truth,
As well as lust, and ignorance of youth; (ll.124-128)

それまでの球形の地球のイメージにつながる、‘Torrid Zone (熱帯)’ や ‘ice (寒帯の氷)’ から ‘calentures (熱射病)’ が連想される。そして ‘agues (おこり)’, ‘hydroptique (水痘症)’ といった病気のイメージへとつながり、生長らえた人間の愚かに病んだ ‘ambition (野望)’ や、 ‘irrelegions (背信)’, ‘Zeals (狂信)’, ‘avarice (食欲)’ が生々しく表現される。まるで『餓鬼草紙』の絵巻物を見るような生々しさである。かくもおぞましい生から人を救えたはずのLord Harringtonが早すぎる死を迎えてしまった。潮の干満のルールを狂わせて (l. 158-160) と最初のイメージに戻ってくる。コンパスが出発したところに戻ってくるように。潮の狂いは時間の狂いである。Lord Harringtonという時計が、神の指示を直接受けて、逆に太陽をコントロールするような大日時計にならずして (ll. 150-154), 青春のこわれやすい (l. 141), 懐中時計 (l. 131) のままに死んでしまった。懐中時計の手である針は震えて狂い、筋肉たる針金は緩み、魂たるぜんまいは切れたり萎えたりし、脈拍の弾み棒は、打たなかったり飛んだりする。声のベルは鳴りやまなかったり、鳴らなくなったりする。と、ここでは解剖学的世界が繰り広げられる (l. 133)。小さな懐中時計の狂いならそれをつけている人のみへの影響ですむが、教会の時計のような大時計の狂いはみんなに影響を与えてしまう。Lord Harringtonのように正確な時計の魂をもっている人が大時計となってくれたら人は正確に時を刻み、宇宙は正しく巡り、世界が調和を失って壊れることもなかったのにと嘆きは尽きない。‘clock’ (ないし pocket-clock, smoll-clock, great-clock) が5回、時を刻むかのように、3行おきに表れ、壊れた時計の描写の時のみ、6行飛んで表れる。しかも、その3行目にあたる行では、‘Expires, or languishes’ と動きが止まりそうになっている様が歌われていて巧みである。この条りの行きつく先は

Though her flood was blowne in, by thy first breath,
All is at once sunke in the whirle-pool death. (ll.161-162)

だから、詩のコンパスはもとの出発点に戻る。

Now I grow sure, that if a man would have
Good companie, his entry is a grave. (ll.165-166)

とまた1つの円が完成する。始まりは死であると。

And Church-yards are our cities, into which
The most repaire, that are in godnesse rich.
There is the best concourse, and confluence,
There are the holy suburbs, and from thence
Begins Gods City, New Jerusalem,
Which doth extend her utmost gates to them. (ll.171-176)

神の聖都エルサレムが神のみもとから出て天から下り、死したLord HarringtonのもとにNew Jerusalemが始まる。²⁸⁾ 始めにして終わりの神の国がこの世に立ち現れる。まさにLord Harrington その人である。New Jerusalemには夜がない。²⁹⁾ Lord Harrington が世を去って真夜中であったこの世が (l.15), 始めと終わりが1つになって夜の無い神の国になる (ll.105-106)。まさに円を描ききって完全になったのである。それは彼のvertueゆえであり、凱旋を祝して 'triumph (行進)' が始まるはずである。しかしTriumphの資格はローマの法によれば内乱ではなく外戦に勝利を治めることだという。Lord Harringtonは青春の熱き欲望や冷たき無知と戦って勝利を治め (ll.193-195), 立派な若者としてこの世を去ったが、その美德ゆえに外に敵はなく国民の嫉妬も妄言も浴びたことはない (ll.196-198)。だからLord HarringtonにはTriumphの資格はない。また自国の領土を守るだけではなく、拓げなければその資格がない (ll.205-206) となれば、自らの魂を肉体から解放して、神の国に行ってしまった (ll. 207-209) だけのLord Harringtonには、やはりTriumphの資格はない。しかし、何より最もその資格の妨げとなっているのが、征服した土地を今の世の戦いから解放するだけでなく、将来に亘って騒乱から解放するという条件が果たせていないということである。今まで数々歌ってきた、何故もってこの世にとどまって自分たちの指針になってくれなかったのかという恨みごとに通じるところがある。またこの後もイギリスは騒乱を味わうことになるであろう、という暗い予感とも重なりあう。³⁰⁾ Lord Harringtonを若くして亡くした悲しみは深く、その魂が限りなく神に近づいたということを受けたくはないのに、その徳の深さを讃えずにはいられない。Triumphの資格はないと言い張りつつ、認められてしまったことを見のがしみたい。Lord Harringtonへの想いのパラドックスはDonne自身の死観の姿に他ならない。Lord Harringtonの死への悲しみは癒されることがなく後を追って自分が共に墓にはいることも許されないなら (ll. 247-250), 詩神Museを墓に送ろうと詩ってこの詩は終わる。Prince Henryへのエレジーと同じく、この詩も詩人としてのDonneの

自己を表象し、時代と社会の中での、またDonne自身の状況の中での詩の永遠の意味と力を謳いあげるのである。

Doe not, faire soule, this sacrifice refuse,
That in thy grave I doe interre my Muse,
Who, by my grieffe, great as thy worth, being cast
Behind hand, yet hath spoke, and spoke her last. (ll.255-258)

こうして、1595年頃に書かれた ‘English on the L. C’ を始めとして、1609年から1914年の間に集中して書かれた葬送歌は、1625年の ‘An hymne to the Saints and to Marquesse Hamylton’ の静謐な調べで終わる。 ‘Elegie on the L. C’ は読み辛く、まだ洗練されていない感じは免れないが、この詩での次の2行がDonneの葬送歌の基調となった。

he gaines now
But life by death, (ll. 17-18)

この詩を捧げられているL. Cは、式部長官Lord Chamberlain, Henry CareyともLionel Cranfieldとも、また Lord Chancellor, Sir Thomas Egertonとも言われるが³¹⁾、故人への頌歌が ‘in whose practice grew / All vertues, whose names subtile Schoolmen knew.’ (ll.19-20) と、その徳を讃える形をとる萌芽もここに見られる。この徳についての考え方は、後の葬送歌と *Anniversaries*におけるDonneの死生観の展開の核をなし、一連の葬送歌でDonneの死生観、人間観となって現れることになる。

James Iの延臣Marquesse Hamyltonへの讃歌は ‘An hymne to the Saints, and to Marquesse Hamylton’ と題され、他の葬送歌が ‘elegie’, ‘obsequies’ と題される中、唯一 ‘hymne’ として書かれている。しかもMarquesse Hamyltonがthe Saintsと並んで、この ‘hymne’ を捧げられているのである。天の者たる天使を ‘you’ と呼んで始まる最初の1行とともに、このことはこの詩の全容を暗示する。

ところで、この詩でのキーワードは ‘order’ である。 ‘order’ は「階級」で、Marquesse Hamyltonが天国へ行ったために天では天体を動かしている天使の階級が1つ増えて豊かになったが、この世からは「侯爵」の階級中のMarquesse Hamyltonなる階級が減ってしまった。 ‘order’ には「秩序」「聖職」「道理」などの意味もあり、³²⁾この世の秩序が崩れ、教会が崩壊し、道理が腐敗してしまったという嘆きとその底流にあることを思わせる。

What ever order grow
Greater by him in heaven, wee doe not so.
One of your orders growes by his accesse;
But, by his losse grow all our orders lesse;
The name of *Father, Master, Friend*, the name
Of *Subject* and of *Prince*, in one are lame;
Faire mirth is dampt, and conversation black,
The *household* widdow'd, and the *garter* slack;
The *Chappell* wants an eare, *Councill* a tongue;
Story, a theame; and *Musicke* lacks a song; (ll.7-16)

この世から天国まであらゆる存在がヒエラルキーに従って存在するという当時の哲学に基づくが、Marquesse Hamyltonの死によってこの世のヒエラルキーから減った1つは、礼拝堂で神の声に耳を傾ける者であり、議会で意見を言う者であり、物語のテーマであり、音楽の歌声だという。聖なる世界では神の声に耳を傾け、俗なる世界では正義を語る。またすぐれた文学が書かれ、美しい音楽が流れる。それがDonneにとっての欠けるものがない世界であり、自らそうありたいと願った姿でもあったであろう。腐敗から免れたこの世は、信仰や正義の世であるべきなのだが、すぐれた文学や音楽もなくてはならない。Prince HenryやLord Harringtonへの挽歌も最後はすぐれた詩を残そうという言葉でしめくられたが、Donneはやはり詩人なのである。Marquesse Hamyltonが死んで肉体が残されるが、魂を失っただけではなく、同時に美しさ (comeliness, beauty) をも失ってしまった。その美しさは単なる美ではなく、'comeliness' とあるように、正しさをも意味している。³³⁾ この世とて同じで、今は美しさ、正しさなどどこにもなく、瓦礫の山にすぎない。この嘆きが続く次の4行は、この詩の特質を示すものである。

So sent this body that faire forme it wore,
Unto the spheare of formes, and doth (before
His soule shall fill up his sepulchrall stone,)
Anticipate a Resurrection;
For, as in his fame, now, his soule is here,
So, in the forme thereof his bodie's there. (ll.25-30)

'a Resurrection (復活)' —— きわめて強い印象を与える1語である。いずれの葬送歌においても秩序の崩壊を嘆き、人間の腐敗を悼み、魂の昇華を希求したが、美しさも正しさも喪失した肉体の復活を断言しているのはこの詩のみである。'order' には古語としてではあるが、'form' という意味もあり、この世の 'order' は失せ、Marquesse Hamyltonの肉体は美も 'form (形

質)’も喪失したが、アイデアたる形質は天のものとして天に返し、天でその形質を纏うことによって肉体が存在し続ける。Marquesse Hamyltonの大いなる名声ゆえに、魂がその徳を後に残った人たちに伝えるべく墓にとどまるならば、昇華されて天の無垢な存在に属するのではなく、悔悛の者として地に存在することになる。肉体が天にあって、魂がこの世にあるとはキリスト教の死にたいする考えとは反対のようだが、それゆえにResurrectionなのである。罪の死を迎える人間が、悔悛して肉体のアイデアを取り戻した存在、即ち天とこの世とをつなぐ存在となる。Marquesse Hamyltonを指針として全ての人間が、ダビデやマグダラのマリアのように救済されることを祈る言葉がDonneの最後の詩となる。

When thou rememb’rest what sins thou didist finde
 Amongst those many friends now left behinde,
 And seest such sinners as they are, with thee
 Got thither be repentance, Let it bee
 Thy wish to wish all there, to wish them cleane;
 Wish *him* a *David*, *her* a *Magdalen*. (ll.37-42)

死は常に生の隣にあり、凶暴に襲いかかってくる。善き生ほど短い、その肉体の死ゆえに魂は死から解放される。善き生を生きた人の徳は人の指針となり、人が神に近づく術となる。人を浄化する道具ともなり、触媒ともなる。宗教も国政も揺れ、腐り、壊れて、行く先も見えない。それも人の業なのである。それは中世からルネサンスを通じてヨーロッパ文化の根底の一つをなす精神構造であった。しかし、人には理性と信仰があり、理性も昂揚させることで信仰につながる。人の理性と徳と信仰は神への途となる。地動説と天動説、プトレマイオスとケプラー、錬金術と天文学、フラスコと望遠鏡、幾何学、音楽と遠近法、そして大航海、コンパスと天使と地図と様々な価値観を共存させ、自己撞着も抱え込みつつ、いくつものコンシートとイメージリの織りなすelegyとeulogyで読むものを魅せてきたDonneは、その詩作の最後を、他の5編のような華やかさと苦渋ではなく、静謐さの一編で締めくくった。5編の葬送歌を残した5年間の葛藤と苦悩を経て、Donneはイギリス国教会の牧師となり、その10年後、詩人生活の結論ともいべき作品を残したのであった。

註

- 1) proportion とharmony がこの詩のキーワードとなっている。拙論『DonneのFirst & Second Anniversaries論(I)AN ANATOMY OF AN ANATOMY OF THE WORLD—中世への絶望と近代への懐疑のマニエリスム—』(『京都府立大学学術報告 人文』第47号)参照

- 2) think, know, up がこの詩のキーワードとなっている。拙論『DonneのFirst & Second Anniversaries論(Ⅱ)THE PROGRESS OF THE RENAISSANCE SOUL IN THE PROGRESS OF THE SOULEールネサンス精神の遍歴：中世と近代の連続性』(『京都府立大学学術報告 人文・社会』第49号) 参照
- 3) Herbert J.C.Grierson(ed.), *The Poems of John Donne (OET)* Vol.Ⅱ, pp. xxv-vi
- 4) Sir A.W.Word & A.R.Waller(ed.), *The Cambridge History of English Literature* Vol.IV, p. 216
- 5) Izaak Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, p. 88
- 6) Sir A.W.Word & A.R.Waller(ed.), *Loc.cit.*, p.216
- 7) R.C.Bald, *John Donne, A life*, pp. 177-8.
ここで, R.C.Bald は, Mrs Boulstredに捧げたのは, Bedford夫人ではなくCraig Garrandの依頼によるものであるとしている。
- 8) tide: I Time, A portion, extent, or space of time; an age, a season, a time, a while
Obs. (OED)
- 9) H.J.C.Grierson(ed), *Loc.cit.*, p.cxlili
- 10) John T. Shawcross(ed.), *The Complete Poetry of John Donne*, p.205
- 11) E. K.Chambers(ed.), *Poems of John Donne*, 'Introduction. John Donne' p.xxvii
- 12) H.J.C.Grierson(ed.), *Loc. cit.*, pp. cxliiii-crlv.
ここでGriersonは, Mrs Boulstredに捧げられた 'Death be not proud' で始まるelegyについて触れ, Donneの 'Death I recant' に返答するものであるが, その作は, その情趣や詩の特色からみてLady Bedford のものであるとしている。
湯浅信之(訳)『ジョン・ダン全詩集』p.497注。
ここで湯浅氏は Donne の 'Death I recant' がHoly Sonnet 'Death he not proud' を打ち消すものだとの説が有力であるとしているが, その根拠は明らかではない。
- 13) 'Death I recant……' の書き出しでは 'thee' と呼びかけられていた死がここから 'he' と表現され, 客観的に死を眺め, 描いていることが分かる。21行目からまた, 'O strong and long-liv'd death' と呼びかけ, 'thou' と称せられていく。
- 14) Izaak Walton, *Loc.cit.*
1607年, Darham の主教 Dr. Morton から申し出られた聖職禄を Donne は次のように断ったと記している。

…and I do that (=return you) with an heart full of Humility and Thanks, though I may not accept of your offer; … some irregularities of my life have been so visible to some men, that though I have, I thank God, made my peace with him by penitential resolutions against them, and by the assistance of his Grace banish'd them my affections; yet this, which God knows to be so, is not so visible to man, as to free me from their censures, and it may be that sacred calling from a dishonour. (括弧内註記は筆者による) (p.34)

Anne の死の後のDonneの痛ましいまでの落胆と苦悩を以下のように伝えている。

In this retiredness, which was often from the sight of his dearest friends, he became *crucified to the world*, and all those vanities, those imaginary pleasures that are daily acted on that restless stage; and they were as perfectly crucified to him. Nor is it hard to think …but that that abundant affection which once was betwixt him and her, who had long been the delight of his eyes, and the Companion of his youth; her, with whom he had divided so many pleasant sorrows, and contented fears, as Common-people are not capable of; not hard to

think but that she, being now removed by death, a commensurable grief took as full a possession of him as joy had done; and so indeed it did: for now his very soul was elemented of nothing but sadness; now, grief took so full a possession of his heart, as to leave no place for joy: If it did? It was a joy to be alone, where like a *Pelican in the wilderness*, he might bemoan himself without witness or restraint, and pour forth his passions like *Job* in the days of his affliction, *Oh that I might have the desire of my heart! Oh that God would grant the thing that I long for!* For then, as the grave is become her house, so I would hasten to make it mine also; that we two might there make our beds together in the dark. Thus as the *Israelites* sate mourning by the rivers of *Babylon*, when they remembered *Sion*: so he gave some ease to his oppressed heart by thus venting his sorrows; Thus he began the day, and ended the night; ended the restless night and began the weary day in *Lamentations*. (pp.51-52)

- 15) Henry VIIIはローマ・カトリックからの離反によりスペイン王女Catherine of Aragonとの離婚を成立させ、Anne Boleynと結婚し、その後のイギリスとスペインの対立を明確なものとした。また、イギリス国内も宗教的に揺れ、Edward VI, Maryと王位が移る度にカトリック、国教徒、ピューリタンが交互に迫害されて国民不安を招いた。
- 16) Exodus, iii,1-5
 Now Moses kept the flock of Jeth-ro his father in law, the priest of Midian: and he led the flock to the backside of the desert, and came to the mountain of God, even to Horeb, / And the angel of the Lord appeared unto him in a flame of fire out of the midst of a bush; and he looked, and, behold, the bush burned with fire, and the bush was not consumed. / ... / ... God called unto him out of the midst of the bush, and said, Moses, Moses. And he said, Here am I.
- 17) Lemnos: In classical time Lemnian earth (Lemunia sphregis) was used as an astringent for snake bites and wounds and in the 16th century for the plague. This medicinal soil was dug ceremonially once a year from a mound near Hephaestia. Pop. (*New Encyclopedia Britannica*)
 Sir A.W.Word & A.R.Waller(ed.), *Loc.cit.*, p.216
- 18) H. J. C. Grierson (ed.), p.216.
 ‘a Lemnia’ はここでは錬金術における philosopher’s stone のことをさし、金属を金に変えるものを指す、と考えている。ゆえに粘土が地中で磁器土となるようにレムノス土の中で水晶がダイヤモンドに変わるのである。ここでいう水晶は涙をさすのであろうか。
- 19) waight(weight); II.An amount determined or determinable by weighing, a definite quantity weighed or capable of being weighed. (*OED.*)
 waight: finite mass, everything we can know and understand.
 greatness: non-finite extension, everything that goes beyond the evidence of our senses. (H.J.Smith, *John Donne: The Complete English Poems*, p.580)
- 20) ‘those, of which they emblems are (Henry の時代がその象徴であるような時代)’は、最後の審判の後にくるといふ平和の時代を表している。
- 21) 湯浅信之 (訳)『ジョン・ダン全詩集』 p. 490注
- 22) Richard E. Hughes, *The Progress of the Soul: The Interior Career of John Donne*, p. 243
- 23) ここでの ‘glasse’ は鏡と眼鏡の両義を兼ねている。35行目で ‘through which…’ となっていることからそれが解る。

- 24) Trunk: I. The main part of something as distinguished from its appendages. 4. *Anat.* The main body of line of a blood-vessel, nerve or similar structure, as distinct from its branches; also *trnst.* the main line of a river, railway... III. A pipe or tube 14. More fully perspective trunk: A telescope (*OED*)
その役割の重要性をも示し, また後の川の比喩への伏線となっている。
- 25) vertue (virtue): I.1. The power of operative influence inherent in a supernatural or divine being. Now arch. or obs. b. An embodiment of such power; esp. pl., one of the orders of the celestial hierarchy (*OED*)
- 26) 'Elegie upon the untimely death of the incomparable Prince Henry' , ll. 48-54. 本稿 p.
- 27) 'Elegie on Mrs Boulstred' , l. 10. 本稿 p.42
- 28) *Revelation*, xxi 1-6
And I saw a new heaven and a new earth: for the first heaven and the first earth were passed away; and there was no more sea. / And I John saw the holy city, new Jerusalem, coming down from God out of heaven, prepared as a bride adorned for her husband. / ... / And he said unto me. It is done. I am Alpha and Omega / the beginning and the end, I will give unto him that is athirst of the fountain of the water of life freely.
- 29) *Revelation*, xxi 25
And the gates of it shall not be shut at all by day: for these shall be no night there.
- 30) 'Elegie upon the untimely death of the incomparable Prince Henry' , ll. 41-42 本稿 p
- 31) A.J.Smith, *John Donne, The Complete English Poems*, p.572
その他 Patrides, Grierson, Gardnerなども注釈しているが特定しにくい。
- 32) order: I. a. rank, grade, class 2.b. A definite rank in the state. 4. A class, group, kind, or sort, of persons, beings, or things, having its rank in a scale of being, excellence, or importance, or distinguished from others by nature or character. II. 5. Each of the nine ranks or grades of angels, according to mediaeval angelology. Also any analogous class of spiritual or demoniac beings. 6. *Eccl.* a. A grade or rank in the christian ministry, or in an ecclesiastical hierarchy. III Sequence, disposition, arrangement, arranged or regulated condition. 13. b. The conditions in which everything is in its proper place, and performs its proper functions. c. Form, shape *Obs. rare* 16. A method according to which things act or events take place; the fixed arrangement found in the existing constitutions of things in a natural, moral, or spiritual system in which things proceed according to definite laws. (*OED*)
- 33) comely: 1. Fair, pretty, beautiful, nice. 3. Pleasing or agreeable to the moral sense to notions of propriety, or aesthetic taste; becoming, decent, proper, seemly, decorous. *arch or Obs. (OED)*

テキスト

Grierson, Herbert J. C.(ed.), *The Poems of John Donne (OET)* (2 Vols.). Oxford: O.U. P., 1912

- Chambers, E. K.(ed.), *Poems of John Donne (The Muse Library)* (2 Vols.). London: Lawrence & Bullen, 1896
- Craik, T.W. & R.J.(ed.), *John Donne, Selected Poetry and Prose (Methuen•English•Text)*. London: Methuen, 1986
- Grierson, H.(ed.), *Donne, Poetical works (OSA)*. Oxford: O.U.P., 1933
- Patrides, C. A.(ed.), *The Complete English Poems of John Donne (Everyman Library)*. London and Melborne: Dent, 1985
- Sanders, Wilbur, *John Donne's Poetry*. Oxford: O.U.P., 1971
- Shawcross, John T. (ed.), *The Complete Poetry of John Donne (Anchor Seventeenth Century Series)*. Garden City, New York: Doubleday, 1967
- Smith, A. J.(ed.), *John Donne, The Complete English Poems (Penguin English Poets)*. London: Allen Lane, 1974
- Stringer, Gary A.(ed.), *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne (Vol.6)*. Bloomington and Indianapolic: Indiana U.P., 1995
- Milgate, W., *The Epithalamions, Anniversaries and Epicedes of John Donne*. Oxford: O.U.P., 1978
- Potter, G. R. & Simpson, E. M.(ed.), *The Sermons of John Donne (10 Vols.)*. Barkley: Univ. of California P., 1953
- Simpson, E. M.(chosen), Gardner, H. & Healy T.(ed.), *John Donne, Selected Prose*. Oxford: O.U.P., 1967

参考文献

- The Holy Bible*, New York: American Bible Society
- Cary, J., *John Donne, Life, Mind, & Art*. London: Faber and Faber, 1981
- Bald, R. C., *John Donne, A Life*. Oxford: O.U.P., 1970
- Walton, Izaak, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson (The World's Classics)*. London: O.U.P., 1936(初版1640)
- Lewalski, B. K., *Donne's Anniversaries and the Poetry of Praise*. Princeton U.P., 1973
- Hughes, Richard E., *The Progress of the Soul: The Interior Career of John Donne*. New York: William Morrow, 1968
- Lieshman, J. B., *The Monarch of Wit*, London: 1951
- Roberts, John R.(ed.), *Essencial Articles for the study of John Donne's Poetry*. Hamden: Archon Books, 1975
- 湯浅信之 (訳) 『ジョン・ダン全詩集』
- Nicolson, Marjorie, *The Breaking of the Circle: Studies in The Effect of the New Science' Upon Seventeenth Century Poetry*. Evanston: Northwestern U.P., 1950
- Kahn, Victoria, *Rhetoric, Prudence, and Skepticism in the Renaissance*. London: Cornell U.P., 1985
- Anghterson, K.(ed.), *The English Renaissance. An Anthology of Sources and Documents*. New York: Routledge, 1998